

# —近藤重蔵、間宮林蔵、そして松浦武四郎—

二〇〇八年一月から当連

載を開始したが、その最終回は、和人で初めて旭川を踏査した文化四年（一八〇七年）の近藤重蔵の踏査を中心述べてたい。なお、『新旭川市史第一巻』で、「近藤重蔵がアイベツ川を下って石狩川に入っているが（p. 421）との記載があるが、これは誤りで、近藤重蔵は、「ノカナンから剣淵川へ山越えし、剣淵川から「テシオ越」して石狩川のタナシへ出たのである。これが、筆者の説である。↓『高橋基—近藤重蔵

の「テシオ越」ルート考』（名寄市北国博物館「北国研究集録第二号」一九九八年三月三十一日発行）

写真は文化四年十月十二日に、近藤重蔵が天塩川筋から山越えして、現在の比布町の棚瀬山（214 呎）

（↓アイヌ語名は、タナシ tanas 高くなっているもの）に出て、石狩川を下り、ビブ（比布）の番屋に宿泊した時の絵図である。

番屋一棟 番人一人

タナシよりビブ迄二里余、流二廻ルトキハ半日時 流下ル時ハ一時程

近藤重蔵は翌十月十三日に石狩川を下り、忠別川との合流点の下流にあった番屋にも一泊する。ここでも重要な記録を残す。

チユクベツ—此川上遠シ 番ヤ三ヶ所アリ此川上

枝川よりのトカチへ越へシ

忠別川のアイヌ語名が、チユクベツ (Chuk-pet-秋・川↓秋になると鮭が遡上する川) であること、忠別川の上流に比布同様に番屋が三カ所あること。忠別川の支流の美瑛川の上流から十勝川への山越え道があることを記録したことである。

近藤重蔵の記録から、アイヌの人々と和人の交易用の「番屋」が、①比布と②忠別川、そして忠別川上流に、伝聞ではあるが三カ所

③④⑤の都合五カ所あったという。それだけのアイヌ人口があったことを物語っている。

文化十年（一八一三年）に、間宮林蔵は羽幌から雨竜川を経由で、タナシへ着く。タナシのトミラウシの妹・アシノメノコ（十八歳）を妻として申し受け、翌年二月に女兒ニヌシマツが誕生して、その子孫が旭川に現住している（秋葉實「北大北方資料室の仮題・北海道河川図」。（註）間宮林蔵は、

『蝦夷図』を作成したが、その一つが、前記の北大北方資料室の

「記事一覽」で、一つが、国立公文書館の『北海道実測図』で、

図名が相応しくないのを、精査するまで、間宮林蔵作成図と判明し

なかつた。筆者は国立公文書館の複製地図を活用している。）

さて、近藤重蔵から五十年後の安政四年（一八五七年）に、松浦武四郎は石狩川を遡り、比布に着くが、前記の近藤重蔵が宿泊したこと、萱蔵や番屋があり、番人もいたことなどは、一切記録していない。

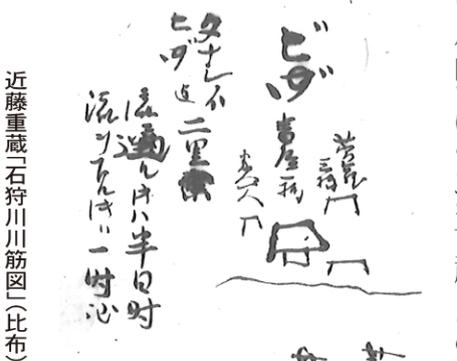
最後になりましたが、本連載の「旭川のアイヌ語地名研究」は、インターネットで、「旭川のアイヌ語地名研究」と、入力検索すると、「あさひかわ新聞ONLINE」—「旭川のアイヌ語地名研究」の「記事一覽」で、第一回から閲覧可能です。ご利用いただければ幸いです。

右のお知らせをもって、二〇〇八年一月からの連載を終了させていただきます。

長い間のご愛読ありがとうございました。

（アイヌ語地名研究会幹事

近藤重蔵「石狩川川筋図」(比布)



方資料室の地図。もう一つが、国立公文書館の『北海道実測図』で、図名が相応しくないのを、精査するまで、間宮林蔵作成図と判明しなかつた。筆者は国立公文書館の複製地図を活用している。）

さて、近藤重蔵から五十年後の安政四年（一八五七年）に、松浦武四郎は石狩川を遡り、比布に着くが、前記の近藤重蔵が宿泊したこと、萱蔵や番屋があり、番人もいたことなどは、一切記録していない。

最後になりましたが、本連載の「旭川のアイヌ語地名研究」は、インターネットで、「旭川のアイヌ語地名研究」と、入力検索すると、「あさひかわ新聞ONLINE」—「旭川のアイヌ語地名研究」の「記事一覽」で、第一回から閲覧可能です。ご利用いただければ幸いです。

右のお知らせをもって、二〇〇八年一月からの連載を終了させていただきます。

長い間のご愛読ありがとうございました。

（アイヌ語地名研究会幹事

## 断章 旭川のアイヌ語地名研究

178 高橋 基